

「病職歴データベースを活用した研究」について

労働者健康安全機構（JOHAS）が運営する労災病院グループでは、全国の労災病院に入院された患者さんにご協力をいただき、それまでの仕事や生活習慣等に関する情報を収集しています。収集した情報は、データベース化して職業と疾病との関連性について研究を行い、その研究成果は就労者の健康の保持増進及び疾病の予防・治療・職場復帰支援に活用しています。今回は「病職歴データベースを活用した研究」についてご紹介します。

VDT（視覚表示端末）作業とは、コンピューターなどのモニターを用いて行う作業を指し、長時間続けると目や身体に負担がかかりやすく、首や肩の痛み、ドライアイ、眼精疲労、視野異常などの眼症状と関連しています。

今般、病職歴データベースを用いて、VDT 作業が及ぼす眼への有害影響に関して検討するため、パソコンやスマホなどの画面を見る時間（スクリーン時間）と座りっぱなしの時間（座位時間）と眼疾患の関連性を検討しました。

その結果、スクリーン時間と座位時間の長さが白内障、眼瞼下垂と正の相関を示し、翼状片とは負の相関を示すことが示唆されました。また、原発開放隅角緑内障はスクリーン時間とのみ正の相関を示すことも示唆されました。

研究論文は以下のURLからご覧になれます。

論文タイトル:『Association between ocular diseases and screen time and sedentary time derived from job-exposure matrices (Scientific Reports)』（佐野圭先生）

https://www.johas.go.jp/kenkyu_kaihatsu/tabid/1074/Default.aspx